

## 第1回美術館運営専門委員会 議事概要

○開催日時 平成29年3月30日(木) 13:30～16:00

○場所 長野県信濃美術館 3階 講堂

○出席者

委員 小川委員、笠原委員、杉野委員、滝沢委員、橋本委員、松本委員、村田委員、山梨委員

長野県 青木県民文化部長、日向信濃美術館整備室長、矢澤施設課長、高山信濃美術館整備室課長補佐

### 【委員長、委員長代理の指名】

○委員長 松本委員(信濃美術館整備担当参与)

○委員長代理 橋本委員(長野県信濃美術館館長)

### 【新美術館整備へのアドバイス】

- 新美術館の理念に、作品を作る人(芸術家)、見せる人(美術館員)、観る人(来館者)とあるが、今、美術館に限らず文化施設は、見せる部分に、作家や市民が参加するようになってきている。見せる人(美術館員)は、近代の美術館システムを前提にした考え方である。近代の美術館システムを前提にして新美術館をつくってよいのかよく考えたほうがよい。美術館員は「つなぐ人」のほうがよい。
- 「人本位」で美術館を運営することは一番大事なことだが、なかなか実行できる美術館はない。コアになるのは学芸員である。建物にお金をかけるだけでなく、ソフトにもお金をかけないと運営するのが難しい。
- 基本構想に沿って実際に美術館の現場がどう動くかの方針を打ち出す必要がある。収集方針や展覧会の開催方針は固めたものではなく、ある程度ゆるやかさを持ったものをつくり、それを掲げながら進めないと意思統一ができない。
- 新美術館の開館は4年後を目指しているが、この4年間でやることは急激に増える。計画的に人員を増やし、その人たちが動かないと新美術館は機能しない。
- 人の問題は重要。学芸員を増やす際には専門性や年齢構成などを考慮する必要がある。
- 新しい美術館ができると3年くらいは人が来るが長続きしない。人が来ることより、活動を持続させることが一番大事。そのためには人が必要である。今の美術館活動は、学芸員だけではなく、広報専門員やレジストラ(美術作品等履歴管理専門員)、ファンドレイジング担当者など、新しい分野のスタッフが必

要である。

- 美術館には広報専門員が必要。学芸員がいつものルートで情報を流すだけでは事足りない。どこに重点的に情報を発信すると集客に結びつく等の広報戦略を立てることは学芸員には難しい。長野県の観光発信力は全国有数。それと上手にタイアップして発信するとよいのではないか。
- 基本構想を実現するには、学芸員中心のしっかりした組織をつくる必要がある。現在の信濃美術館の体制は県内の他館を支援するどころか、他館から支援をお願いしなければいけない状況である。
- 学芸員の数と質の充実はもちろんだが、学芸員同士、学芸員と総務、あるいは指定管理であればその組織、そういう人間関係を風通しよくすることを期待したい。それがないと何をやっても難しい。個人的な利害の対立ではなく、よい美術館をつくらうとする気持ちでまとまることが一番大事である。
- 指定管理期間を長期化だけで基本構想を実現するための人材確保や組織がしてくれるのかよく研究したほうがよい。
- 美術館の基本は調査研究である。学芸員が調査研究する時間を確保できる人員配置をしないと美術館活動はどんどん痩せていく。
- 美術館のコア部分は、コレクションと展覧会。学芸員が調査研究をしっかり行って自主企画展の充実を図ることが大切である。
- 県内美術館の学芸員の調査研究を支援することは重要だが、信濃美術館の学芸員が調査研究できる環境が整わなければ、他館学芸員の支援には結び付かない。
- 学芸員は、ローカルな視点とグローバルな視点を持つ必要がある。学芸員が自信を持って仕事をするにはグローバルな視点を持つ必要があり、そのような環境を作らなければいけない。世界水準の美術作品を展示するためにやるべきことはたくさんある。
- 近代美術に徹してほしい部分はある。信州の美術史は、日本の近代美術の中で特異な重要性がある。県内にあるアーカイブの活用を忘れないでほしい。
- 最近できた美術館とは違う新しい公立美術館の形を全国に先駆けて見せてほしい。今まである近代美術館史のアーカイブを充実した常設展を行ってほしい。また、東山魁夷館は集客に大きな要素を占めているが、新しい要素も取り入れていく必要があるのではないか。
- 県立美術館として、世界の美術から地域の美術まで全方向を観せるのではなく、何か特徴が必要ではないか。

- この美術館の特徴は、信濃美術館よりもお客様が入る東山魁夷館があること。これをさらに活かしていくことが必要である。信濃美術館の来館者は県内を中心なのに対して、東山魁夷館の来館者は県外が中心である。この実態を活かした信濃美術館をどうやってつくっていくか考える必要がある。
- 美術館がこれまで担ってきた役割と、今の人々が美術館に求めるものとの少しずれがあるように思える。そこをきっちり捉え、修正を加えなければいけない。時代に即した美術館像を求めてほしい。
- 善光寺の参拝客を信濃美術館に呼ぶのは来訪の目的が違うため簡単なことではない。そのことを突き抜けるくらいの何かが必要である。
- 改築の際に一番大事なことは、現場の学芸員が何を求めているかを吸い上げること。ただ、学芸員の意見を統一することは簡単ではない。学芸員の意見を上手にまとめてよい美術館をつくってほしい。
- 新美術館の施設は、美術館員だけでなく来館者にも使いやすいものにしてほしい。使いやすさとは何かはみんな違う。そこを調整しながら進めてほしい。
- 善光寺から信濃美術館に向かうにつれて人が少なくなる。歩道橋を渡ろうという人は少ない。善光寺から人を誘導しやすい動線を整備したほうがよい。
- 美術館自身、学芸員、地域の人たちが育っていくことを背景にして、いろいろな構想をつくる必要がある。ただ形をつくれればよい訳ではない。
- 美術館の本質は研究と企画だが、県内には専門家ではない絵を描く人たちがたくさんいる。その人たちが新美術館に何を期待しているかを汲み取り、バランスをとりながらどのように建築に反映していくか議論が必要である。
- 県立美術館が県内美術館の活動を支援し、中核的な役割を担おうとするならば、災害発生時に県内美術館の被災状況を把握して活動することが必要。県内美術館との連携の中に、県立美術館が災害時にどう対応するのかを含めて検討する必要がある。

#### **【美術館運営専門委員会の検討事項】**

- 挙げられている項目は、どれも検討を急ぐ事柄である。全体の人員体制を考える際には、各項目を順番に検討するのではなく、早めにすべての項目を総ざらいしたほうがよい。緊急性のある施設整備に集中していると他が遅れてしまうことを危惧している。

#### **【信濃美術館整備事業の設計者選定】**

- 美術館を設計したことがある設計者であっても、美術館の使い勝手や必要な機

能について承知していない場合がある。現場の学芸員と協議して設計変更できる余地を残したほうがよい。

- 設計者と協議する際、現場の学芸員同席のもとで行わないと使い勝手が悪いものになってしまうことを危惧している。

#### 【新美術館に必要な施設・施設】

- 建物全体として、免震構造などの地震対策をどうするか考える必要がある。
- 各室をどのように配置（ゾーニング）するかが非常に重要。収蔵・展示部門と飲食などが行える部門をゾーン分けして配置しないと総合的な虫菌害対策の実施などで困る。
- バリアフリーは、来館者だけでなく、美術館で働く職員の管理部門も含めて対応が必要である。
- 収蔵庫は、広く確保したと思ってもすぐに手狭になる。それで収集が滞っては本末転倒である。収蔵庫は、収納方法を工夫しながら可能な限り余裕のある設計にしたほうがよい。
- 収蔵庫は、将来的に拡張できる設計にしておく必要がある。
- 学芸員が外部の方と会う接客スペースが必要。広報を充実させる場合、頻繁に広報関係者が来館する。
- 事務室の広さは、インターンなどの受け入れも考慮する必要がある。

(以上)